



「幸せの 待ち居る如し 初暦」

稲畑汀子

寒い日が続いていますが、今は受験生にとって受験勉強の真っ最中で大変な時期でしょう。親としてもとても気になる場所ですね。「勉強しなさい」や「勉強をしないでなにしているのよ」などという言葉は控えて、「頑張ってるね」「大丈夫よ」くらいの言葉掛けがちょうど良いのではないのでしょうか。そっと、見守っているよというくらいの姿勢が子どもにとって心地よいのではないのでしょうか。

道徳について考える



来年度から、小学校では道徳の時間が教科となります（中学校では、平成31年度開始）。道徳心が緩み、マヒしているのではと思われる出来事が多い今の社会のことを考えた時、学校で道徳教育をすることはとても大切なことだと思います。

みなさんは、道徳の授業のことを覚えておられますか。どんな物語を読んだか、どのように感じ、考えたのかを覚えておられますか。

「その時の先生の言葉を今も時々思い出す」という人もおられることでしょう。また「道徳の時間のことは覚えていないよ」という方もおられるでしょう。しかし、覚えていない人でも、今のみなさんの心の何処かに残り、行動を判断する時の基準となっているはずです。

考えてみましょう。

道徳の時間に、「正しい行いをしましょう」「決まりを守りましょう」ということを習った日に、交通ルールを守らない大人の姿を見たときには子どもたちはどう思うのでしょうか。「大人は守っていないが自分は守ろう」と考える子どももいるでしょうが、「大人が守っていないのだから子どもも守る必要はないのだ」と考える子どもの方が多いのではないのでしょうか。それではせっかく習ったことが無駄になってしまいます。大人の行動が、子どもの行動へ大きく影響し、大人が良い姿を見せることが子どもたちにとって「道徳心」を育む一番の機会になるのではないのでしょうか。

「道徳心」を育てることは、家庭教育の大切な役割の一つです。人とのかかわりの中で、「うそをついた」「弱い者をいじめた」「卑怯なふるまいをした」とき等は、「ならぬことはならぬものだ」と教えなければなりません（【什の掟】「青少年センターだより第12号」に記載）。成長期によって言い方も変わりますが、道徳の基準が分からない小さな時からしっかりと子どもにしてはいけないことを教えることが大切です。

さらに大切なことは、子どもに「決まりを守りなさい」「礼儀正しくしなさい」「責任を果たしなさい」等と要求したことは親も守らなくてはなりません。口で言うだけでなく、親も態度で示さなくてはならないということです。親は反面教師ではいけないのです。子どもは敏感です。いつも親の姿を見ています。「子は親の鏡」ですので、子どもによい姿を見せることこそが一番の道徳になるのです。

親として、地域の大人として子どもたちに良い姿を見せることができる大人になりたいものです。